

# 図書館のRFID（ICタグ）

東京都立中央図書館 吉田 直樹

六月、出版・倉庫業界がRFID視察団をヨーロッパに送った。その報告映像の中にRFIDを導入して棚卸を行う書店がある。説明にあたった店長らしき男性が、手にしたハンディ・ターミナルを書棚の本の背にそって滑らせていく。

この映像に違和感を持った。ハイテクと読み取りの人手による処理がそぐわない。これなら書棚にレールを設置し、読み取り機を走らせれば、自動化できるのではないか。しかし、レールがあると書棚から本を取り出すお客様の邪魔になる？いや、レールなんて必要ないんですよ、と同席していたメーカーの人は言う。書棚くらいの高さでしたら、床面を自走するロボットのほしごを上下させるだけで上の棚から下の棚まで順次読み取らせることができます。

なるほど。図書館でも閉館後、ロボットが書棚の間を走り回って、図書の間を確認する。明かりは必要ない。暗闇の中で黙々と働いて回る。

二年前、ある会合で外国のRFID宣伝映像を見せていただいた。実際に放映されているものか知らないが、テレビコマーシャル風に作られていた。

男がコンビニ風の店内で、さりげなく左右を見わたし、棚から商品をとってポケットにしまう。入口にいる警備員の

眼が鋭く光る。これが数回繰り返された後、男は店を出る。その男に近づき、前に立つ警備員。緊迫した一瞬の間を置き、警備員は手にした紙を差し出して言う。「お客様、レシートをお忘れです。」

レジを通ることなく決済が済んでいることを示す宣伝だ。「紙」のレシートで落とすところが笑える。

これをウォーク・スルーと言う。ごちゃごちゃと手続きすることなく、ただ通り抜けると処理が済んでしまうことを示す。図書館では書棚から借りたい本を黙って持ち出し、黙って返しておけば手続き完了だ。

こうした夢物語を実現するための基盤となるのがRFID技術である。図書館資料の電子化が進んでいるとはいえ、すべての資料が媒体なしの形態にもならないだろうから、物の管理は続く。RFIDは物と情報の間を、バーコードよりも効果的に結びつける核となる。

さて現在のRFIDに、先に書いたほどの実力があれば、すでに物品管理の世界を制覇しているだろう。実際には、書棚に何回もアンテナを差し込まなければ一段を読み取れない、貸出資料の読み漏れを防ぐために冊数を手入力する、薄い本はバーコードで読んだ方が早い、といった現実がある。まだまだ製品として

は揺籃期なのだ。

何よりも価格が高い。タグを資料一点に装着するのに百円かかる。これでは流通商品にはつけられない。繰り返して使わなければ、とても割に合わない。流通業界でも反復利用されるコンテナ類に使われるが、個品（一冊一冊）ではないため数が出ない。というわけで図書館の出番である。図書館では個品単位で繰り返しの流通が行われる。

現時点のRFIDの実力でも図書館なら恩恵を受けられる。例えば、自動貸出機を設置した図書館で、それによる貸出割合が五十%を超えらるといふ図書館がいくつも出てきた。完全にベイするのは容易ではないが、将来を見すえたインフラと考えれば許容できるだろう。

このような理由から、図書館は現在、RFIDの先端業界に踊り出ている。

光栄なことだが、これから発展する技術を実務で使用するとすると、気になるのが規格の未整備だ。

先進諸国における図書館のRFID導入状況は、どの国でも似たりよったりだ。したがって、図書館のタグに、どの情報をどのように収録するか、という議論も各国同じように盛んである。すでに、オランダ、デンマーク、オーストラリア、フィンランドで規格制定済み。アメリカもほぼ確定。もちろん、日本でも検討している。

こうした情勢では国際的な通用性が問題になってくる。すなわちISOである。TC46\*の場での検討は昨年暮れから精力的に進められているが、やはりそれな

りに時間はかかる。

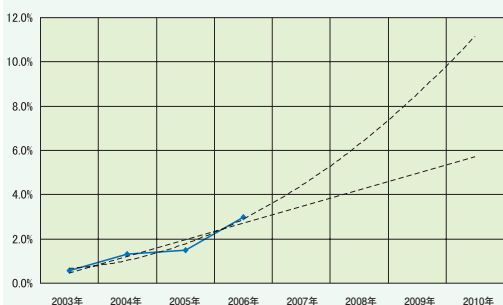
RFID導入の契機で最も多いのは新館建設である。となれば、規格の制定を待つて何十年に一度の機会を見送るわけにはいかない。こうした事情も各国同じであるのか、規格に寄らない導入を危惧する声は海外からも聞こえてくる。

日本では出版界がタグを装着して刊行することを考えている。諸外国では、まだこうした計画は耳にしない。図書館にとっては実にありがたい企画であるが、これもまた実現を待つわけには行かず、独自導入は進む。ちなみに分母を定めやすい公共図書館での導入状況を示すと、図のようである。

（サービス部情報サービス課）

\* ISO/TC46 国際標準化機構/情報とドキュメンテーション技術委員会。現在「図書館におけるRFID」作業部会が相互運用技術分科会SC4内に設置され検討が進められている。

公共図書館RFID導入館数割合



復刊丸善ライブラリーニュース・RFID特集にて続きを掲載予定です。